

グ ロー バ ル セ ン タ ー 年 報

第 28 号

令 和 5 （2023）年 度

大 阪 教 育 大 学 グ ロー バ ル セ ン タ ー

目 次

第一部 寄 稿

巻頭言	箱 崎 雄 子	1
	(グローバルセンター長)	
日本天文学・和算史の時代区分再考	城 地 茂	2
	(グローバル センター)	
中級日本語クラスにおける「短歌」を 教材とした教育実践	高 谷 由 貴	7
	(京都橘大学発達教育学部)	

第二部 グローバルセンター記録

令和5年度 グローバルセンター活動報告	14
令和5年度 グローバルセンター行事	30

付 記

令和5年度 グローバルセンター担当教員名簿	38
令和5年度 グローバルセンター運営委員会名簿	40
編集後記	41

巻頭言

箱崎雄子

グローバルセンター長

昨年度は、ウィズコロナ時代への移行とともに、国際交流を再開した年でしたが、今年度は、一言でいうと、コロナ禍を乗り越えて、従前の形での国際交流を実現できた年でした。

前期には、交換留学の特別聴講学生ⁱ13名、後期には、交換留学の特別聴講学11名と日本語・日本文化研修留学生ⁱⁱ15名を本学に受け入れました。また、2023年4月には、ウガンダ、エルサルバドル、ジンバブエ、タイ、チリ、パキスタン、マラウイ、リトアニアから9名の教員研修留学生ⁱⁱⁱが本学に來られ、それぞれ学校教育に関する研究を進めました。

交換留学派遣もコロナ禍以前の規模に戻り、前期には、アメリカ合衆国、大韓民国、クロアチア共和国、スイス連邦、スウェーデン王国、フィンランド共和国に12名の学生を派遣し、今後は、アメリカ合衆国、オーストラリア連邦、スウェーデン王国、中華人民共和国、フィンランド共和国、フランス共和国に9名の派遣が予定されています。海外短期研修も本格的な再開に向けて動き出し、7件のプログラム（ビクトリア大学語学研修、チェンマイ大学英語・SDGs・文化研修、リヨンカトリック大学語学研修、釜山教育大学／大邱教育大学文化研修・授業観察実習、シンガポール NIE 国際教育実習、UNCW 語学研修・観察実習、グリフィス大学語学研修）に計49名の学生が参加しました。

大学内での取り組みとしては、2023年11月に「第14回グローバルセンター・国際シンポジウム2023」が、昨年に引き続き、Zoom オンライン会議システムを利用して開催されました。「国際協働学習の先進例とこれから」と題して、本学で今年度より施行が開始され、来年度に本格実施を目指している「国際協働学習」に関して、他大学及び本学における先行事例を紹介するとともに、国際協働学習の意義と課題及び予想される将来像と目標について討論を行いました。

グローバルセンターでの活動の詳細につきましては、4部門（連携開発部門、国際教育部門、語学教育部門、留学生教育部門）からの活動報告をご一読ください。

グローバルセンターでは、これからも教職員一丸となって、キャンパスの国際化に取り組んでいく所存です。引き続き、ご指導ご鞭撻をお願い致します。

ⁱ 本学と学生交流協定を締結している海外の協定校から交換留学プログラムを利用し、本学へ留学している学生

ⁱⁱ 外国の大学学部在学し、日本語・日本文化に関する分野を専攻している方を対象に日本政府が実施する国費留学制度を利用して、本学へ留学している学生

ⁱⁱⁱ 諸外国の初等・中等教育機関及び教員養成学校で原則として通算5年以上の教職経験がある現職教員を対象に日本政府が実施する国費留学制度を利用して本学へ留学している学生

日本天文学・和算史の時代区分再考*

城 地 茂
グローバルセンター

1、緒論

和算とは、日本の数学という意味であるが、これは、1877（明治 10）年に、教育には西洋数学（洋算）を使うことが決まり、それに対して以前の数学を和算としたものである。したがって、江戸時代（1603-1867）までは、単に「算」と言っていた。「算」とも書き、字から分かるように竹製の籌（算木）という計算道具を使う数学で、他の文化と同様、中国からもたらされたものだった。

2、律令格式時代「古代」

飛鳥時代（592-710）に、古代律令制度を模倣しようとした時代に、暦法などと共に隋（581-618 年）、唐（618-907）といった北朝の数学を導入したのである。暦法を計算するためには、円周率の計算も必要になってくる。そのためには、平方根を開くのが必須になってくる。開平方術は、『九章算術』（著者不詳、25 年頃）では完成しており、『周髀算経』（著者不詳、前 100 年頃）でも計算できていたかもしれない¹。それを使い劉徽（263 年頃）は内接多角形から円周率の計算に成功した。祖沖之（429-500）は小数点以下 7 桁まで計算している。また、体積の計算も必要であり、開立方術やそれを発展させた一般の三次方程式も『緝古算経』（王孝通、620 年）の頃までには完成していた。こうした、「古代」北中国数学が導入されたのである。式部省大学寮で上述した数学書が貴族の子弟に教育されていた。

この「古代」の数学も広義の意味では和算であるが、残念ながら日本には、当時の書籍は伝わっていない。しかし、南宋時代に出版されたものや、清代に校正された数学書が伝わっており、それが、再度江戸時代に輸入されている。

律令体制を支える数学なので、編者はこれを「古代」律令期（554-730）とした。さらに『周髀算経』が重視され、それが世襲制度につながった時代を「古代」格式期（731-1246）としたい。

また、「古代」の特徴として、絶対的な権威をもつ北中国数学は模倣の対象であって、応用したり日本で改良されるべき存在ではなかった。唯一、『九司』（著者不詳、成立年不詳、散逸）という数学書名が伝わっているが、これは、今のところ中国にも韓国にも無いもので、もしかすると日本で編纂されたのかもしれないが、その実情は分からない。

3、前和算期

13 世紀になると、中国（南宋、元）では高次方程式が解けるようになり、その高次方程式を機械的に立てる天元術が発明された。天元術の入門書である『算学啓蒙』（朱世傑、1299 年）は、中国では散逸してしまったが、李氏朝鮮で教科書に採用されたため、それが日本に伝わった。それに訓点をほどこし

* この論文には、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 21K00250（C）を受けた。

¹ 『算数書』（著者不詳、前 183 年頃）では、盈不足術で近似分数を求めている。

たものがある。天元術は、「古代」の北中国数学を発展させたものであるが、13 世紀になると南中国でも新たな数学が生まれた。明代には算盤へと繋がる、四則演算を早く正確に計算するような種類の数学である。天元術を解いた『算学啓蒙』や『測円海鏡』（李冶、1248 年）にも解方術は、全く「草」（計算過程）が無かったが、『数書九章』（秦九韶、1247 年）や『楊輝算法』（楊輝、1275 年）では、計算過程を重視している。特に『楊輝算法』では 1 つの二次方程式から 2 つの解が求められることを示し、さらに、大きな方の解を出す場合に、「実」（実数項）が一時的に負数になってしまうことを述べている（翻積）。また、多くの足し算を必要とする魔法陣（中国では 3 次は「洛書」、日本では関孝和以降「方陣」）の作成もしている。こうした傾向は明代も続き、計算道具として算盤が普及した²。万暦数学書群を代表する『算法統宗』（程大位、1592 年）の方陣は『楊輝算法』の一部を使っている。

この「近世」の数学書は、『算法統宗』は民間の貿易で伝わったようだが、李氏朝鮮の教科書だった『算学啓蒙』『楊輝算法』³は豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592-3 年、1597-8 年、万暦朝鮮之役、壬辰之乱）の際に得られたもののようである。

このように「近世」南北中国数学が伝わると、日本では、応用が行われるようになった。14 世紀には、『孫子算経』（孫子、400 年頃）にあるような 8 桁進法が日本独自の 4 桁進法に変わっていたが、江戸時代になると、更に変化、応用するようになった。

『塵劫記』（吉田光由、1629 年）になると、算盤を 4 面用いて平方根を開く商実法を行ったりするようになっている。算盤の欠点である高次方程式が解きにくいことに対する工夫である。この時代を「近世」前和算期（1247-1673）と考えている。

『塵劫記』はベストセラーとなったが、海賊版も多く出版されることに吉田光由は頭を痛めたようである。何冊か塵劫記と題する数学書があるが、吉田光由によるものではなく、後世のものか、同名のものだけである。

また、『塵劫記』では、日本ならではの工夫をしている。中国数学では、問・答・術（本によっては計算過程の「草」も）を記述し、教科書として読者が覚えるものである。これに対して、『塵劫記』1641 年版（通称、遺題本）では、答えを付けない問題だけを示して読者に挑戦したのである。『塵劫記』を習得しただけでは解けない難問を出題したのである。これに対して、読者は難問（「好み」）を解くと、さらに新しい術が無ければ解けない問題を主出題するということになった。これを遺題継承と和算史家・遠藤利貞（1843-1915）が名付けた。『塵劫記』⁴ - 『算法闕疑抄』（礪村吉徳、1660 年）、『算法根源記』⁵（佐藤正興、1669 年） - 『古今算法記』⁶（沢口一之、1671 年） - 『発微算法』（関孝和、1674 年）へと続く遺題継承が一番有名である。これによって、『古今算法記』によって「翻積法」の特例が指摘され、天元術が一応の完成を見た。

² 清代の数学者、梅文鼎（1633-1721）は、中国数学史を籌（算木）の時代（宋元時代まで）、算盤の時代（明代）、筆算の時代（清代）と時代区分を行っている。

³ 『詳明算法』（安止斎、1373 年）も教科書になっていたが、この影響は和算には少ない。

⁴ 『参両録』（榎並和澄、1653 年）も『塵劫記』に答えている。

⁵ 『太極天元門術書』も、『算法根源記』150 問に答えている。

⁶ 『古今算法一十五問答術』（会田安明、19 世紀）『古今算法一十五問答術起源』（会田安明、19 世紀）も『古今算法記』に答えている。

4、勘定方和算期

多元高次方程式が必要な遺題が出題され『発微算法』によって、点竄術（日本式代数システム）が発明され、これによって高次方程式は新たな段階に到達したといえよう。狭義の和算、日本独自の数学の誕生である。また、点竄術の発明によって、この系譜の遺題継承は完成されたと言えるだろう。

「近世」勘定方と算期（1674-1780）を画した『発微算法』には、関孝和の遺稿をまとめた『括要算法』（関孝和遺稿、1709年）や『大成算経』（関孝和・建部賢明・建部賢弘、1710年）があり、関孝和の業績が理解できるように収集されている。

この時期にも遺題継承は続き、『天元樵談集』（中村政栄、1702年）から始まった系列がある⁷。すでに、天元術、点竄術を用いて循環小数の研究などにまで及んでいる。『天元樵談集』（中村政栄、1702年） - 『下学算法』（穂積与信、1715年） - 『中学算法』（青山利水、1719年） - 『竿頭算法』（中根彦循、1736; 38年） - 『開承算法』（池辺清真、1743; 45年） - 『闡微算法』（武田済美、1745; 50年⁸）がある。

この期間は、役方（事務的武士）、とくに財務関係の勘定方を勤めた武士が数学者となっていることが多い。関孝和や山路主住らがそうである。そこで、「勘定方と算期」としたが、関流の和算がまとめられた時代でもあった。山路主住は『関流算法草術』（山路主住、1762年⁹頃）として教科書が編纂されたのである。しかし、入門書的な『塵劫記』などは需要があり出版できたが、それ以上の高度な和算を学ぶ人は少なく、出版するほどの需要が無く、写本で伝わっている。学習者が写本することで和算を覚えたという側面もあっただろう。『関流算法草術』25種が所蔵されている。

5、^{じかた}地方和算期・紅毛算期

こうして関流和算が確立すると、^{じかた}地方の村長、豪農層が学ぶようになった。測量や納税など必要な技能だったのである。また、関流以外にも諸派の和算学派があったが、会田安明の創設した最上流が関流に対抗しうる勢力になった。関流の教科書とも言える『精要算法』（藤田貞資、1781年）の成立をもって、「近世」地方和算期の確立と考えている。また、1720年には西洋書の禁止が緩和された。江戸時代はキリスト教を禁止するため西洋暦算書を含めたすべての西洋書が禁止されていたが、8代将軍・徳川吉宗が緩和し、西洋科学の導入を図ったのである。これによって、ネイピアの計算尺を使った「籌算」や筆算といった西洋数学が導入された。これには『籌算指南』（千野乾弘、1767年）がある。

これらは、漢訳のものであったため、先に述べた地方豪農層には広まらず、医学者や兵学者という武士層に広まった。そこで、この時期を近世地方・紅毛と算期としたい。先の『籌算指南』は1781年より先行しているが、地方和算層を中心として、1781年を区切りとした。

また、この時期は、前の時期が遺題継承に対して算額奉納という方法が、伝播に貢献した。難問を解けたことを神仏に感謝するため、数学の絵馬を奉納したのである。もちろん、そうした部分もあるが、

⁷ 地方和算期の『算学鉤致』（石黒信由、1811; 1819年）では、: 卷上（1804年）、(一)『算法樵談集九問答術診解』、(二)『下学算法一十一問答術診解』、(三)『中学算法一十二問答術診解』、(四)『竿頭算法二十五問答術診解』、卷中（1811年）、(一)『算学便蒙七問答術診解』、(二)『探玄算法九問答術診解』、(三)『開承算法一十二問答術診解』、(四)『闡微算法一十五問答術診解』、卷下（1815年跋、1814年最終題）（1819年刊）と、この系列全体に新たな解釈をしたものとなる。

⁸ 1745年入江脩敬（序）1750年（刊）

⁹ 日本学士院 8163『関流算法草術』29冊に「宝暦十二(1762)年十月[識]」とある。

この時期に増えた和算塾の広告という側面もあったように思われる。それは、和算塾の一門の師匠が弟子の奉納した算額を和算書に附録として付けたり、本によっては算額を収録しただけの和算書を出版するからである。その際に、弟子から寄付金を集め、出版費用とした。『溫知算叢』（白石長忠（関）、1828年）の例では、金2朱（1/8 両）である。こうして出版費用を集め、出版したのである。算額は露天にあるため、19世紀のものでも解読が難しいが、こうして算額が記録されたため、当時の問題が現代まで伝わるという副次的効果もあった。このように、算額奉納は、和算塾の経営を助けるという側面もあり、そうでなければ、新たな和算書の出版は難しくなっていたのである。

ここで特徴的なのは、地方和算期の三河（現・愛知県）岡崎の由精堂（関流 10 伝・広瀬祐貞、?-1882?）の著書、蔵書を収集したものである。これまで、由精堂蔵書は、日本学士院に 17 種類があったが、明治維新のためか、来歴が分からなくなってしまうていた。しかし、小さな算学塾にも匹敵する量の算学・天文学書が発見され、俄かに脚光を浴びている¹⁰。関流 11 伝の田中至次（?-?）、同門の 11 伝の川澄徳次（1859-1911）¹¹ともども、明治維新をどう切り抜けたのかが興味深い。

最後は、明治維新を潜り抜けた人々の和算書である。洋算派（翻訳派）、陸海軍派、和算転向派などである。しかし、これらの人々の大多数は、洋算にその研究題材を変えてしまった人々である。これらに属さなかった人々が、遠藤利貞のような人たちであった。かれらは、和算を懐かしむ人たちであったが、その執念は凄まじいものがあつた。とくに、遺題継承¹²、算額奉納というところに注目したのは、出色であった。なお、昭和に入ると、古典数学書院（1935 年まで沢村写本堂¹³）が、日本の明治前の「誇るべき」数学を覆刻した。また、これらと同時期には、三上義夫（1875-1950）、藤原松三郎（1881-1946）が、こうした数学をまとめた。特に藤原松三郎は、本稿をまとめる上で非常に世話になった『明治前日本数学史』をまとめたのである。

大区分	中区分	小区分		年代	事項		
和算時代	律令格式時代「古代」	律令期		554- 730	暦博士来日	古代	
		格式期		731-1246	『周髀算経』重視格		
	和算時代「近世」	前和算期		1247-1673	『数書九章』著	中世	
		和算期	勘定方 和算期	1674-1780	『発微算法』刊行		近世
			地方 和算期・ 紅毛算期	1781-1876	『精要算法』刊行		

¹⁰ 66 種の和算書が記録されている（城地茂・劉伯雯（2019）『『算法諸約術』（斎藤元章、1805 年）と由精堂算学塾』『数理解析研究所講究録別冊』B73, 99-115）。

¹¹ 『歴史探訪クラブ』176。

¹² 遠藤利貞の用語では「遺題承継」としていた。

¹³ 沢村寛（?-?）・沢村正（?-?）が編集、発行した。

洋 算 (数 学) 時 代			1877-	東京数学会社の設 立	近 代
-------------------------	--	--	-------	---------------	--------

参考文献

- [1]日本学士院（編）（藤原松三郎）（1954）『明治前日本数学史』、岩波書店。
- [2]任 継愈（他編）（1993）『中国科学技術典籍通彙』「数学巻」5 巻、鄭州:河南教育出版社。
- [3]任 継愈（他編）（1993）『中国科学技術典籍通彙』「天文巻」11 巻、鄭州:河南教育出版社。
- [4]城地 茂（2005; 2009）『日本数理文化交流史』台北:致良出版社。
- [5]城地 茂・劉 伯雯・張 濤（2011）「宋元明代数学書と「阿蘭陀符帳」『数理解析研究所講究録』1739:128-137.
- [6]城地 茂・劉 伯雯・張 濤（2012）「『三才發秘』（陳雯、1697 年）と「阿蘭陀符帳」『数理解析研究所講究録』1787 :105-115.
- [7]城地 茂・張 耀祖・張 濤・劉 伯雯（2014）「東西の格子乗法から見た近世日本数学」『数理解析研究所講究録』別冊 50: 167- 180.
- [8]城地 茂（2014）『和算の再発見』、化学同人。
- [9]城地 茂（2020）「『楊輝算法』の関孝和写本と延世大学校本」『大阪教育大学紀要』第 69 巻、41-51.
- [10]城地 茂（2022）「関孝和と山路主住・戸板保佑-『乗除通變算宝』の成立」『グローバルセンター年報 26 : 13-22.
- [11]城地 茂（2023）「戸板保佑『乗除通變算宝』」『グローバルセンター年報』27: pp.18-25.

中級日本語クラスにおける「短歌」を教材とした教育実践

高谷 由貴

京都橘大学発達教育学部児童教育学科

1. はじめに

本稿は日本国内の大学における、交換留学生を対象とした日本語教育の授業実践記録である。日本語教育において、日本語・日本文化の教材として「短歌」「俳句」「川柳」等を題材としたものは、これまでに多く見られた（榎原ほか(2009)など）。言語や文化に興味を持って、短期の交換留学を開始した学習者にとって、これらの文学作品を使用した生教材は、関心を喚起する可能性が高いと言えるだろう。実際に、学習者にとって興味深いテキストを読むことが、言語を学習する際にプラスに働くことも指摘されている（ライトバウン・スパダ 2014:p.222）。

今回の実践は、「読む」「書く」を中心的技能として向上させることを目標とする授業の中で、日本の「エッセイ」「短歌」「俳句」を生教材として全回にわたって取り上げたものである。

特徴としては、次の点が挙げられる。半期（週1回の授業・全14回）のコースの中で、1・2回に限って「エッセイ」や「短歌」を取り上げるのではなく、「エッセイ」「短歌」「俳句」を「読んで書く（創作する）」ことを一貫したテーマとして掲げ、自分の体験や身の回りの出来事等の話題を描写できることを目指した。

以上の目的に沿って、筆者は2023年度前期に中級対象の日本語教育の授業において生教材を使用した活動を行った。以下、授業の目的、概要、学習者の取り組みについての考察、今後の取り組みに向けた課題について述べる。

2. 授業の目的

テーマに沿ったエッセイ・短歌を読み、自分の体験に基づいたエッセイ・短歌を「作る」ことを通して、文章表現力をつける。

授業の概要

3.1 クラスについて

クラスの参加者、授業の実施形態については、以下の通りである。学習者は半年から1年の短期交換留学生で、全員が大学生の2～4年生である。

- 授業回数 全14回 100分
- 授業形態 対面授業
- 参加人数 10名
- 日本語のレベル 中級レベル:コース開始前のJ-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)の判定において、中級(B1相当)および、中級前半(A2相当)の学習者が含まれる
- 学習者の出身地域:韓国・中国・台湾

なお、授業の初回冒頭に各学習者に対して、「短歌」「俳句」について聞いたことがあるか確認したところ、短歌の形式、日本語における詩の一つの形態であることを知っているが、自分で作った経験はないという学習者がほとんどであった。

3.2 授業内容

本授業では、14回の授業を大きく4つの部に分けた。

第1部「私」・「友達」についてのエッセイ

第1部では「私」「友人」をテーマにしたエッセイを読み、「欠点」に関する表現を使用して「私」や「友人」について描写できることを目標とした。

第2部「私」・「友達」についての短歌

第2部では、「私」「友人」をテーマにした短歌と批評文を読んだ。また好きな短歌を探して読み、自分の好きな短歌をクラスメイトに紹介する口頭の活動を行った。「私」に関する作品（エッセイあるいは短歌）を創作する活動も行った。

第3部「食べ物」についてのエッセイ

第3部では、「食べ物」をテーマにしたエッセイを読み、「味」に関する表現を、文章から探して列記し、説明できることを目標とした。さらに、食べ物をテーマにしたグルメ記事を書き、ペア活動でお互いにおすすめの食べ物を紹介しあう活動も行った。

第4部「思い出」についての短歌

第4部では、様々な現代短歌を取り上げた。「字余り」「字足らず」などの技法についても確認し、「思い出」についての短歌とエッセイを読んで、実際に「思い出」に関する作品（エッセイあるいは短歌）を創作する活動も行った。

それぞれの部で、テーマに沿ったエッセイあるいは短歌の読解を行い、およそ月に1回、エッセイや短歌、または短歌の紹介文を作成する。創作するものはエッセイでも、短歌でも、作品の紹介文のいずれでも良いとした。読解ではトピックに関連する語彙・表現も確認し、短歌の部ではその技法についても学んだ。また、エッセイ・短歌を創作してペアでお互いに読み合い、コメントやアドバイスをする活動を各部で取り入れ、読解だけでなく会話の要素を組み込んだ。

短歌を取り上げた第2部・第4部においても、短歌だけでなく、その短歌を解釈するエッセイも同授業内で扱った。これは、学習者によっては短歌に馴染みがない場合もあるため、解釈の手掛かりとなるものを示すほうがよいと判断したからである。また、短歌を創作することに関しては個人による興味や関心の差が大きいと判断したため、選択制の課題の一つとして提示するにとどめた。

成績評価については、月に1回あるエッセイ・短歌の提出を課題点とした。また、授業中の活動においても、要約、感想、自分で選んだエッセイ・短歌を紹介する作文を作成し、これらも授業中課題として提出してもらい、評価の対象とすることとした。以下では、短歌を中心的な題材とした第2部と第4部について詳述する。

3.3 短歌をテーマとした授業内容

授業回数、教師と学習者の行動に分けて示す。第2部は、授業の第3～6回、第4部は授業の12～14回における活動内容である。

表1 短歌をテーマとした授業内容の詳細

回数	授業の主な流れ・授業担当者の行動	学習者の活動
3	第2部「私」についての短歌① ● 短歌の基本的な説明を行う ● 東 直子『短歌の詰め合わせ』アリス館 pp.6-7 ● 音（おん）の数え方 ● 季語が必要でないこと ● クイズで音の数え方を確認する	● クイズに答える ● 何音ですか／〔っ〕促音(そくおん) 〔ん〕撥音(はつおん) 〔一〕長音(ちようおん) は1音 ● 〔解答例〕リンゴ／3音
4	第2部「私についての短歌」② ● 短歌と批評文を配布する ● 下の句・上の句などの短歌に関する語を中心に語彙の確認を行う	● 短歌と批評文を読み、内容確認問題と穴埋めクイズを行う ● 「ほんとうにあたしでいいの？」はどんな時に言う言葉ですか？ ● 穴埋めクイズ:下の句を自由に書いてください。「ほんとうにあたしでいいの？○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○」。 ● 穴埋めクイズの解釈についてペアで共有する。
5	第2部「私についての短歌」③ ● 短歌をさがして紹介する ● 短歌をテーマにした書籍やインターネットサイトを複数紹介する。学習者の興味・関心に任せて興味を持った作品を探し、その作品の出典とともにメモするように指示する	● インターネット記事や書籍を使用して短歌を探す。 ● 出典とともに書く。 ● 内容を紹介する文章を書く。
6	第2部「私についての短歌」④ ● 短歌の紹介文を回収・添削する	● 完成した短歌の紹介文を使ってペア

		でお互いに紹介する
12	第4部「思い出」についての短歌① ● 現代短歌・川柳・俳句をまとめて配布し、以下の3点の解説と練習問題を提示する ● 字余り・字足らずの箇所を学習者が見つけるように指示し、特に字余りは現代短歌に良く見られることを伝える ● 「Vます形」の使用 短歌・俳句において「飲む→飲み・する→し・来る→き・食べる→食べ」といった「Vます形」を使う例が見られることを示す ● 比喻・擬人法が使用された短歌を示し、学習者の解釈を促す ● 「「ほどけた蝶」とは何でしょうか。考えてください。」 ● 学習者の反応を見て、蝶々結び・リボン結びなどのヒントを出す	● 短歌を読み、字余りの部分を挙げる（下線部） ● 作中人物の気持ちや場面について自由に意見を言う ● 「また電話しろよ」「待ってろ」<u>いつもいつも命令形で愛を言う君</u> ● 「この味がいいね」と君が言ったから<u>七月六日はサラダ記念日</u> ● 俵万智『サラダ記念日』河出文庫 1989年 ● 「Vます形」に書き換える練習を行う ● 見方さえ変えれば<u>心軽くなる→</u> () ● 鏡から落ち込むなよと<u>励まされる→</u> () ● 「ほどけた蝶」「生き返らせる」等の表現の解釈を考えて話す ● 雑踏の中でゆっくりしゃがみこみほどけた蝶を生き返らせる 木下龍也（2013）『つむじ風、ここにいます』書肆侃侃房
13	第4部「思い出」についての短歌② ● 「思い出」について話す、創作することをテーマとして、短歌とエッセイの資料を配布する ● 語彙・内容理解の問題を示す ● 「文章を読んで、「思い出」について話しましょう。思いついた言葉をメモしましょう。」 ● エッセイの文章を使用し、「思い出」「それについての感情」を学習	● 青空にエンドロールが流れだす 蟬が鳴いてるだけだった夏 ● 穂村弘・堀本裕樹（2022）『短歌と俳句の五十番勝負』新潮文庫 ● 印象に残っている思い出について話す ● 「○○○ってなんだか、★★★感じる」という形でまとめたり、メモを取ったりする

	者に思い出してもらおう ● 「映画のエンドロールってなんだか、切なく感じる。」 ● 「〇〇〇ってなんだか、★★★感じる」 ● 「〇〇〇・★★★に入る言葉を考えましょう」 ● 「思い出」であれば、「今年」「夏」また「留学生活」に限らなくても良いことを示す	
14	第4部「思い出」についての短歌③ ● エッセイまたは短歌の創作を行うことを説明する ● 課題の選択肢を示す①～③ ● ①「青空にエンドロールが流れだす 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇夏」に入る言葉を考えて、「思い出」「季節」「夏」「終わり」をテーマに短歌を作りましょう。 ● ②または、オリジナルで短歌を創作してもいいです。①②の場合は、作った短歌を説明する文章を書きましょう。(150～200 文字程度) ● ③「思い出」をテーマにしたエッセイを書いてください。タイトルをつけて、段落に分けてください。(200～300 文字程度)	● ①～③から課題を選んで取り組む ● 授業最終日は短縮授業のため、授業中に完成できなくても最終期限までに提出できれば良いとした。

4. 考察

3 節で述べたように、本授業では短歌の技法・現代短歌を味わうだけでなく、自ら興味を持った短歌を探して紹介したり、希望者に限っては「創作」したりといった活動を行った。以下に学習者による取り組みの差やその要因の考察を述べる。

4.1 学習者の反応とその要因

言語の学習は多くの要因に左右されることが知られる。要因としては学習者の個性と経験、社会的・文化的な環境、第1言語と目標言語の構造など、多様である（ライトバウン 2014:p229）。

そのような中でも、今回の実践においては、学習者の興味・関心や個人的経験による価値観が影響したのではないかと考えた。当該クラスの学習者は、コース開始前のプレイスメントテストで、中級前期

～中級の判定を受けている。テストの結果からうかがえる個々の学習者の日本語運用能力と、活動へ関心には特に相関が見られなかった。

文化の一つとして短歌の技法に興味を持って取り組んでいた学習者が大半であったが、特に「創る」という側面については日本語能力の差よりも、個人による関心や興味の差が大きいと感じられた。

学習者の中でも、もともと日本の文学や短歌に興味を持ったり、作品のテーマに興味を持ったりといった学習者については、率先して創作に取り組んだり、作品を探す際も積極的に取り組んでいたりとといった様子が見ええた。

一方、今回の実践では検討できなかった要因による可能性もある。その一つは、第1言語と目標言語の構造の差異による影響である。今回の実践で対象とした学習者は、韓国、中国または台湾の出身者で占められている。第1言語の構造による学習の結果の差異についても可能性があるが、今回はその点についての検討は出来なかった。

4.2 選択制の課題について

月1回の作文課題については、文字数を200字程度に設定した上で、①テーマに関するエッセイ、②テーマに関する自作の短歌とその紹介文、③書籍などから探した短歌とその紹介文でも良いとした。どの課題を選んでも、身の回りの出来事や個人的経験といった、テーマにかかわりのある出来事についての簡単な描写ができることが求められる。自作の短歌の作品を作成し提出した学習者は、全体の三分の一ほどであったが、その他の課題を選んだ学習者についても、そのような描写を行うタスクを通して文章表現力の向上させることができると考える。

5. 今後の取り組みに向けて

学習者によって取り組みの速度や、関心度が異なる場合には、タスクのレベルや分量の調整が必要となる。取り上げる生教材が短歌であっても、それ以外の教材であっても、調整は必要であると考えられるが、本授業での場合で問題となった事例は次のようなものである。

作品の一部を自由に考える「穴埋めクイズ」を行う際に、学習者によって、当てはまる語句を自由に、複数挙げる場合もあれば、時間をかけても思いつくことが難しい場合もあった。このような場合は、選択肢を提示する、例を多く示してタスクを単純化するなど、教材準備や授業内のインターアクションの中で調整を行っていく必要がある。

また、今回取り上げた現代短歌だけでなく、和歌やそれに関する古典文法・表記についても興味を持つ学習者がいた。それらについては本授業では、時間を割くことができなかったため、今後さらに扱う生教材について検討したい。

参考文献

- ・ 岡本真帆 (2022) 『水上バス浅草行き』 ナナロク社
- ・ 岡本真帆 (2022) 『水上バス浅草行き所収の短歌の批評』 <https://note.com/mhpokmt/n/n02c0d5dcfb9b>, 2023/08/31 最終確認
- ・ 木下龍也 (2013) 『つむじ風、ここにいます』 書肆侃侃房
- ・ 榊原千鶴、宮地朝子、北村雅則、蔡佩青(2009) 『日本語写作力専門塾』 衆文館図書公司(台湾) , 名古屋

屋大学日本語研究会

- ・ 俵万智（1989）『サラダ記念日』河出文庫
- ・ 東直子（2019）『短歌の詰め合わせ』アリス館
- ・ 穂村弘・堀本裕樹（2022）『短歌と俳句の五十番勝負』新潮文庫
- ・ ライトバウン，パッツィ M.スパダ，ニーナ（2014）『言語はどのように学ばれるか』白井恭弘，岡田雅子訳，岩波書店

グローバルセンター活動報告

連携開発部門

部門長 中野 知洋 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
副部門長 亀井 一 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
井上 直子 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
王 林鋒 准教授（高度教職開発系高度教職開発部門）
後藤 健介 准教授（健康安全教育系健康安全科学部門）
城地 茂 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
出野 文莉 教授（表現活動教育系美術教育部門）
仲矢 史雄 教授（理数情報教育系理数情報部門）
Brown Robert Sanborn 准教授（多文化教育系グローバル教育部門）

1. 連携開発部門会議の実施

連携開発部門では、海外の大学との大学間交流協定の締結や更新、海外交流重点校等との連携に関わる議題を検討した。諸問題に対応するため随時メール会議を開催した。

2. 協定校との連携

（1）大学間交流協定の締結

令和5年度には、以下の協定を締結した。

○新規締結協定

- ・タイ王国 チャンカセーム・ラチャパット大学
- ・タイ王国 チェンマイ大学

○更新協定

カナダ ビクトリア大学

- ・ドイツ連邦共和国 トリア大学言語・文学・メディア研究学部
- ・アメリカ合衆国 アリゾナ大学
- ・中華人民共和国 天津大学

日本語教育の副専攻プログラム受講者向けの教育実習をベトナムのホーチミン市師範大学にて実施した。また来年度、タイ・チャンカセームラチャパット大学で実施予定である。

（2）海外交流重点校との連携

昨年度に引き続き、現在8校選定されている海外交流重点校について、配分額を審議し、5校への配分を決定することで、学術交流促進の支援を行なった。

3. 国際会議

（1）第14回 グローバルセンター国際シンポジウム（全学 FD 事業）

2023年11月15日、「国際協働学習の先進例とこれから」と題して、本学で今年度より試行が開始

された国際協働学習に関するシンポジウムをオンラインで開催した。学外のゲストと本学教員という3名の講師による報告と討論が行われ、学生及び教職員合わせて約35名が参加した。

島根大学の香川准教授は、豊富なデータと事例に基づき、国際交流・国際教育のプログラムを教員養成の選択必修科目として、カリキュラムに入れ込む際に必要なことを、グローバルコンピテンシー、すなわち多角的な視点の形成、他者との協働、おかしかったら直すという点から解説した。

また、本学において国際協働学習に先駆け、独自の国際協働の取り組みを続けてきた井上直子教授は、リヨン第三大学とのオンライン交流が、人の縁をつないで発展したこと、その際に障壁となる時差について取り上げた。

そして、赤木登代副学長が、今年度本学で実施された試行の総括と、教員研修留学生による事例について報告し、円滑な導入に向け本学が蓄積して来た知見を共有した。

最後に3氏の実践報告を手がかりとして、「国際協働学習の未来」と題して、国際協働学習のさらなる発展と予想される将来像と目標について討論を行った。

アンケートでは香川准教授について、「いくつものエビデンスと着眼点がどこかの説明があり、さらにそのエビデンスに基づく考察などの説明もわかりやすく納得感があるものでした」等、また井上教授の取り組みについては「英語力は大事だが、それ以上に日本の学生には「必要なときにはきちんと話す」という姿勢が不足している傾向にあり、それが国際協働学習の障壁になっている」等、赤木副学長の報告には「企画と運営、国際協働学習のありかたが明確になりました」等、多くの意見が寄せられた。

（2）東アジア教員養成国際コンソーシアム（ICUE）

2023年12月9日、「DX時代における東アジア教員養成教育」というテーマで、第17回東アジア教員養成国際コンソーシアムシンポジウム（ICUE）が東京学芸大学と本学の共同で開催された。日中韓3ヶ国の教員養成系大学と学部あわせて18大学145名が参加し、本学の岡本幾子学長の開会挨拶と、各国の基調講演の後、午後の分科会セッションでは、「DXと教員養成の発展」「社会構造の変化と教員養成・研修の在り方」「ダイバーシティ教育の課題と展望」という3つのテーマで研究報告と討論が行われた。

本学の王林鋒准教授がセッション3のファシリテーターを担当したほか、田中満公子特任教授、瓜生彩子教授が口頭発表を、また王准教授がポスター発表を行った。

（3）国際教育フェアへの参加

今年度はEAIE、APAIE、NAFSAへの参加はなかった。

4. 広報誌の発行

令和5年度は、グローバルセンター広報誌『OVER the RAINBOW』の発行を年1回とし、2月に第33号を発行した。

国際教育部門

部門長 橋本 健一 准教授（多文化教育系・英語教育部門）
副部門長 王 林鋒 特任准教授（高度教職開発系・高度教職開発部門）
赤木 登代 教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
李 址遠 特任准教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
井上 直子 教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
ギンズバーグ ジェイソン 准教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
小林 和美 教授（多文化教育系・社会科教育部門）
篠崎 文哉 特任講師（多文化教育系・英語教育部門）
筒井 瑞貴 特任講師（多文化教育系・グローバル教育部門）
中野 知洋 准教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
中山 あおい 教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
箱崎 雄子 教授（多文化教育系・英語教育部門）
プール ジャスティン 講師（多文化教育系・英語教育部門）
米澤 千昌 特任講師（多文化教育系・グローバル教育部門）

国際教育部門は交換留学や海外短期研修の企画・実施に関わる業務を行い、本学学生の海外派遣を支援する部門である。2020年に始まった新型コロナウイルス感染症の影響は2023年度になりようやく「収束」を感じるところもあるが、ウクライナ・ロシア情勢や円安・燃料費高騰等「日本から海外へ」という動きを難しくする要因が依然残っている。そんな中でも学生は意欲的に海外チャレンジの道を探り、短期・長期での海外での学修に乗り出し、当部門に関わる教職員はそのサポートのために最大限の力を尽くした。特に短期研修はプログラム数・参加者数ともコロナ前の盛んだった頃にかなり近いレベルまで戻ってきており、急激に増える業務量にうれしい悲鳴をあげる状態である。

本稿では2023年度に実施された海外派遣の説明会や関係するイベントの振り返り、そして本年度に実施した交換留学派遣・短期研修派遣等について報告して、2024年度以降の学生海外派遣がどのようなものになっていくのかを考えていきたい。

1. 留学関係のイベント

グローバルセンターでは新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより海外渡航が不可能になっていた時期も、収束後に再開するであろう各種プログラムやオンラインで参加できる語学・文化プログラムを紹介するなどして、少しでもこれまでに醸成されてきた海外チャレンジの機運を維持することを目指した。2021年後期からの交換留学再開、2022年度からの短期研修再開を経て、2023年度はコロナ禍以前の規模に近いレベルで学生派遣に取り組むこととなり、各種プログラムを紹介する説明会についても、過去数年に比べてボリュームの大きなものとなった。

前期には4月19日（水）に交換留学説明会を、翌週の26日（水）には海外短期研修説明会をそれぞれオンラインで開催して、本学で参加可能な交換留学・短期研修についての概要を説明した他、担当国別教員による各国の魅力やプログラムの紹介、過去の交換留学参加者による体験談、またJSAF担当者による認定留学の説明などがなされた。後期については10月4日（水）に交換留学と後期に募集

される短期研修の説明会を併せて実施した。参加者数は前期が同時接続でそれぞれ 60～70 名、後期は事前参加登録者ベースで交換留学が 46 名、短期研修が 72 名と盛況であった。

また在学生に向けた留学説明会だけでなく、オープンキャンパスにおいては高校生に向けても本学で参加可能な研修や留学についての説明会・相談会を実施している。本年度はオンラインでの説明会参加者が 4 名、相談会参加が 7 組と参加者数としては課題を残すものの、一人一人の疑問に丁寧に対応できる等、ポジティブな側面もあった。今後は参加者数と実施形態・内容についてのバランスを見直して、説明会はオンデマンド形式にするなどの方策を検討する必要がある。

2. 海外派遣事業

(1) 交換留学

2023 年度において、交換留学派遣についてはコロナ禍に関わる制約はほぼなくなっており、多くの学生が海外提携大学での中長期の学修に臨んだ。昨年度の年報執筆以降に出発した 2023 年の派遣留学生数と派遣先は以下の通りである。

2022 年度後期派遣（2023 年 2～3 月出発）		2023 年度前期派遣（2023 年 8～9 月出発）	
梨花女子大学（韓国）	2 名	梨花女子大学（韓国）	1 名
ソウル教育大学（韓国）	1 名	チューリッヒ教育大学（スイス）	2 名
チューリッヒ教育大学（スイス）	2 名	ザグレブ大学（クロアチア）	1 名
		リンネ大学（スウェーデン）	2 名
		オーボ・アカデミー・バーサ校 （フィンランド）	2 名
		ウェスタン・カロライナ大学（米国）	2 名
		ノースカロライナ大学ウィルミントン校 （米国）	2 名

この他、2024 年 2 月以降に豪州に 2 名（内 1 名は語学力の条件付き）、8 月以降に中国に 1 名、スウェーデンに 2 名、フィンランドに 2 名、フランスに 1 名、米国に 1 名の派遣が予定されている。

(2) 海外短期研修・オンライン研修

2023 年度の学生海外派遣では短期研修の再拡充が非常に大きな動きとなった。2022 年度は長期間派遣がストップしていたことや新型コロナウイルスへの警戒が未だ解けない状態であったこと、さらには派遣先の情勢などの要因から少しずつ再開することとして、夏季研修においてはカナダ・ビクトリア大学での語学・文化研修、春季研修においてはアメリカ・UNCW の語学研修が実施されたが（この他オンライン研修としてタイ・チェンマイ大学での英語＋SDGs オンライン研修も実施）、2023 年度は以下の表のとおりさらに多くの研修が実施され、多くの学生が海外で語学・文化・教育等について研鑽を重ねた。

研修名	派遣先国	実施時期	参加人数
ビクトリア大学語学研修	カナダ	8 月	9 名
チェンマイ大学英語・SDGs・文化研修	タイ	8～9 月	3 名
リヨンカトリック大学語学研修	フランス	9～10 月	6 名
釜山教育大学／大邱教育大学文化研修・授業観察実習	韓国	11 月	7 名
NIE 国際教育実習	シンガポール	2～3 月	8 名
UNCW 語学研修・観察実習	米国	2～3 月	11 名
グリフィス大学語学研修	豪州	2～3 月	5 名

3. その他の事業

この他に 2023 年度の学生派遣に関わる事業として実施されたものとして、国際交流基金が実施している「日本語パートナーズ派遣事業」における大学推薦特別プログラムを活用して、2022 年度中に学内で推薦され、国際交流基金の選抜も通過した 1 名が、2023 年 9 月～12 月の期間でフィリピンでの日本語教育支援に携わることとなった。また 2023 年度も大学推薦特別プログラムということで本学に推薦枠が割り当てられ、6 月から 7 月にかけて学内周知・募集・選考を行った結果、フィリピン・タイに 1 名ずつを推薦することとなり、国際交流基金での選考の結果フィリピンの 1 名が採用となり、2024 年度に事業に参加することとなった。

また 2022 年度に再開された東京学芸大学主催の日タイ大学生国際交流プログラムについて、2023 年度も引き続き実施されることとなり、4 月に学内募集・選考を行なった結果 3 名が参加することとなり、東京学芸大学の学生チームと共にタイの学生との交流に取り組むこととなった。5 月には埼玉でタイ側の学生受け入れに参加して、12 月にはタイに渡航して現地の学校を見学するなどした。

この他、新たな取り組みとして留学に関わる経済的支援、具体的には奨学金獲得を学生自らが主体的に行うことを促すためのセミナーを 10 月に開催した。海外への挑戦がますます現実的なものとなる中で、大学から提示される奨学金の機会を受け身で待つのではなく、自ら獲得可能なものを探すところまで含めて積極的に動く意識を学生につけること、さらにはその獲得のために自身の留学そのものの目的・意義を明確にさせることなどを特に強調した。さらに 2022 年度に引き続き、トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラムの申請にあたって、申請書の添削サポートを有志教員で行うなど、特に年度後半に向けて、学生の海外チャレンジを支援する動きがさらに活発になった 1 年であった。

4. 次年度に向けて

2023 年度は特に海外短期研修の再拡充が目立つ 1 年となった。各研修でコロナ禍前と同程度あるいはそれ以上の参加者があり、学生としても待ち望んでいた海外体験だったのだなどの思いを改めて強く感じる場所である。次年度以降も同様に学生の海外派遣を促進していきたいところではあるが、一方では続く円安や燃料高騰、世界情勢等特に経済的な面で壁が高くなる一方であるのも事実と言えよう。JASSO 奨学金の獲得に向けた動きなど、せっかくの素晴らしいプログラムの数々に少しでも学生が参加しやすくなるようにと教職員も努力をしているところであるが、学生自身が自らの留学目的・意義をもっと明らかにして、さまざまな支援（含奨学金）を得られるように意識喚起をしていきたい。それがすなわち、学生にとっての有意義な海外体験につながるはずである。

語学教育部門

部門長 Justin Parker Pool 講師（多文化教育系英語教育部門）

副部門長 篠崎 文哉 特任講師（多文化教育系英語教育部門）

橋本 健一 准教授（多文化教育系英語教育部門）

Robert Sanborn Brown 准教授（多文化教育系グローバル教育部門）

小林 翔 特任准教授（多文化教育系初等教育部門）

筒井 瑞貴 特任講師（多文化教育系グローバル教育部門）

1. 語学教育部門の取組体制

語学教育部門は、英語教育部門所属教員 3 名、グローバル教育部門所属教員 2 名、初等教育部門所属教員 1 名で構成されている。

語学教育部門は、以下の目標を掲げている。

- 1) 学生の留学意欲を高める。
- 2) 学生の外国語・外国文化学習への取り組みを支援する。
- 3) 語学の外部試験の目標達成を支援する。
- 4) 学生が自律的に学習できるよう、学習計画の立案を支援する。
- 5) グローバル・ラーニング・コミュニティ（GLC）を運営する。

2. 語学教育部門会議

今年度は語学教育部門会議を 4 ヶ月に 1 回程度開催した。英検 IBA や TOEFL ITP テストの運用、終了した GLC プログラムの反省や今後の GLC プログラムの企画について話し合った。下記 3 回の会議のほか、随時 Microsoft Teams を使った議論も行った。

第 1 回 2023 年 5 月 29 日（月）— 2023 年 6 月 2 日（金）(Teams による書面審議)

第 2 回 2023 年 10 月 11 日（水）(Zoom によるオンライン会議)

第 3 回 2023 年 2 月 28 日（水）(Zoom によるオンライン会議)

3. 正課授業と連動した外部試験の実施について

大阪教育大学では、学生の英語力を測定するために、英語の外部試験を実施している。今年度、教員養成課程の 1 年生、2 年生、3 年生全員が英検 IBA を受験した。4 年生以上は Oxford Quick Placement Test を実施した。一方、教育協働学科では、1 年生に TOEFL ITP レベル 2 を、2 年生にレベル 1 を課した。

4 外国語学習支援ルーム（Global Learning Community）の取り組み

外国語学習支援ルーム（GLC）は、大阪教育大学の学生、留学生、教員、スタッフ全員が、世界とつながり、外国語でのコミュニケーション能力を高め、世界の人々と楽しく出会い、学習と文化理解を促進するためのスペースである。メンバーが互いに支え合うコミュニティであることを意味している。語学教育部門は、柏原キャンパスの GLC および、天王寺キャンパスでは分室のランゲージチャットルームを運営し、学生のニーズに応じた様々なプログラムやサービスを提供し、学生の自律学習を支援している。

(1) 講座

GLC では毎年、教員研修留学生の協力を得て、英語を学び、異文化交流をするイングリッシュ・ランチタイムチャットを年間を通じて開催している。今年度も週 3 回、7 カ国（パキスタン、エルサルバドル、チリ、リトアニア、ウガンダ、ジンバブエ、マラウイ）から 8 名の教員研修留学生がチャットリー

ダーとなってセッションを担当した。のべ257名の学生が参加し、文化や習慣など様々な話題について楽しく学ぶことができた。

5月8日より、COVID-19に関する大学の活動方針緩和に伴い、GLCのランチタイムチャットについても、希望する学生には昼食をとりながらの参加を許可することに変更した。(2021年度後期より一部を対面で行っていたが、感染予防のために飲食を禁止していた。)

GLCでは外部試験対策と団体受験を通じて学生の学習意欲を高め、就職活動を見据えた資格取得や、留学促進に努めている。対策講座については、今年度は英検二次対策講座、TOEIC対策講座、IELTS対策講座を開講し、のべ109名の学生が参加した。団体受験については昨年度に続いて、英検2級の団体受験およびTOEIC IPテストの団体受験を柏原キャンパスで実施した。英検の団体受験には38名が受験し、24名が2級を取得することができた。TOEIC IPテストは様々なレベルの28名の学生が受験した。多くの学生に安価で外部試験の受験機会を提供することができた。

(2) 個別相談・学習相談

上記の学習プログラムの他、ネイティブの教員による個別レッスンを提供し、学生が積極的に様々な活動に挑戦できるよう、年間を通じて支援している。ブラウン准教授とプール講師による1-on-1レッスンをのべ20名の学生が利用し、発音矯正や英検のライティング添削、スピーキング対策など、学生の個別のニーズに応じた様々な内容の指導を行った。

さらに今年度からは、筒井特任講師がGLCで週二回のオフィスアワーとして学習・留学相談を行った。年間のべ29名の学生がオフィスアワーを訪れた(学習相談12件、留学相談19件)。留学相談には、本学の交換・短期留学の他、ワーキングホリデーや私費留学も含めた多様な留学の相談が学生から寄せられた。学習相談には、日々の学習方法についてや学習リソースの他、進路や資格について相談を行った。さらに、英検を受験する学生に対して、ライティングとスピーキングの指導も行った。

(3) 図書サービス

GLCでは、外国語学習に関する書籍や教材を多くそろえ、貸出サービスを行っている。各種英語検定試験の教材はもちろん、韓国語、ドイツ語などの英語以外の検定試験や、多読本、雑誌なども備えている。学生は4週間(春・夏の休暇期間中は長期間)借りることができ、語学学習のために書籍を買う費用を節約できるようにしている。今年度柏原キャンパスGLCでは約980冊、天王寺キャンパスでは50冊の図書を貸し出した。

(4) GLCサポーター活動

約10名がGLCの開室日10時～15時までシフトを組み勤務し、来室者の対応や、イングリッシュ・ランチタイムチャットと下記チャット運営のなど、活発に活動した。学生同士のネットワークを活用して、留学中の学生とリアルタイムでつないだ留学体験報告会も盛況であった。それぞれ広報・図書・留学相談・学生企画の担当を決め、自主的に活動した。

留学生の交流イベント

日本語チャット	前期は教研究生を中心に、後期は交換留学生を中心に、のべ50人が参加した。開催日時は火曜日の昼休み、前期と後期を合わせ13回開催した。
外国語チャット	韓国、中国、ドイツ、フランス語のチャットが行った。交換留学生・日研生の協力で、2週間に1回程度開催した。全部併せて91人が参加した(ドイツ語は36人、中国語は24人、韓国語は20人、フランス語は11人)。
留学体験報告会	交換・私費留学中の4人が渡航までの計画や準備、現地での経験について報告した。1月10日の昼休みに開催し、対面とオンラインで、のべ9人が参加した。

留学生教育部門

部門長 米澤千昌 特任講師（多文化教育系グローバル教育部門）
副部門長 李址遠 特任准教授（多文化教育系グローバル教育部門）
副部門長 棟形康平 特任講師（多文化教育系グローバル教育部門）
石橋紀俊 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
井上博文 教授（多文化教育系国語教育部門）
碓田智子 教授（健康安全教育系健康安全科学部門）
櫛引祐希子 准教授（多文化教育系グローバル教育部門）
櫻澤誠 准教授（多文化教育系社会科教育部門）
城地茂 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
寺坂明子 准教授（総合教育系教育心理学部門）
中山あおい 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
藤田真依 特任講師（理数情報教育系理数情報部門）
水野治久 教授（高度教職開発系高度教職開発部門）
望月久稔 教授（理数情報教育系理数情報部門）

1. 留学生教育部門会議の実施

留学生教育部門では、本学で学ぶ留学生のための日本語・日本事情教育、生活・就学支援、受入れ促進、受入れプログラムの開発等に係る業務を行っている。非正規留学生ワーキング、正規留学生ワーキング、宿舎ワーキング、奨学金ワーキングの4つのワーキングに分かれて業務にあたり、部門会議では、留学生教育全体に係る議題や各ワーキングからあがってきた検討事項について話し合ったり、報告事項の共有を行ったりした。2023年度は4月11日（火）、6月8日（木）、10月5日（木）の3回会議を行った。

2. 留学生受入れプログラム

本学では学部留学生、大学院留学生以外にも、研究生（私費・国費）、研究留学生、交換留学生、日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生）、教員研修留学生（以下、教研生）、短期海外教育研修の受入れを行っている。以下、グローバルセンターが中心となってプログラムをコーディネートしている交換留学生、日研生、教研生について報告する。

2.1 交換留学生の受入れ

交換留学とは、本学と学生交流協定を結んだ海外の大学に在籍している学生が、1学期間、または1年間本学に留学する制度である。2023年度は前期に13名、後期に11名の合計24名の交換留学生を受入れた。2022年度後期から継続して2023年度前期まで在籍した学生14名を加えると、合計38名となる。2022年度から継続の学生のうち11名は、前期に2022年度に採択された日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（双方向）の奨学金を受給した。

2022 年度後期からの継続学生			14 名
2023 年度前期	台湾	6	13 名
	中国	2	
	ベトナム	2	
	韓国	1	
	アメリカ	1	
	キルギス	1	
2023 年度後期	ドイツ	3	11 名
	韓国	2	
	台湾	2	
	ベトナム	2	
	フランス	2	

2.2 日研究生・教研究生の受入れ

日研究生とは、日本政府(文部科学省)奨学金留学生として、日本の大学において 1 年間、日本語能力及び日本事情、日本文化の理解の向上のための教育を受ける外国人留学生¹である。2023 年度は 15 名の日研究生を受入れた。大使館推薦が 14 名（うち、日系人枠が 2 名）、大学推薦が 1 名である。大学推薦については、2023 年 3 月に面接試験を行い、推薦者を決定した。

教研究生とは、諸外国の教員であり、日本の大学において学校教育に関する研究を行う日本政府(文部科学省)奨学金留学生（教員研修留学生）²である。2023 年度は JASSO 大阪日本語教育センターと大阪大学国際教育交流センターで半年の日本の予備教育を修了した 9 名を受け入れた。

日本語・日本文化研修留学生	ブラジル	3	15 名
	タイ	2	
	ミャンマー	2	
	インドネシア	1	
	中国	1	
	チリ	1	
	ウクライナ	1	
	トルクメニスタン	1	
	フランス	1	
	ポーランド	1	
	ベトナム	1	
教員研修留学生	タイ	1	9 名

¹ 引用元：文部科学省「2023 年度 日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項 日本語・日本文化研修留学生」https://www.mext.go.jp/content/20221215-mxt_kotokoku01-000026535-01.pdf（2024 年 2 月 21 日アクセス）

² 引用元：文部科学省「2023 年度 日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項 教員研修留学生」https://www.mext.go.jp/content/20221215-mxt_kotokoku01-000026535-06.pdf（2024 年 2 月 21 日アクセス）

	パキスタン	1	
	エルサルバドル	1	
	チリ	1	
	リトアニア	1	
	ウガンダ	1	
	ジンバブエ	1	
	マラウイ	2	

2.3 短期海外教育研修の受入れ・協力

2023 年度にグローバルセンターが実施、または協力したプログラムは以下の通りである。ソウル教育大学の受入れプログラムについては、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定受入）に採択され、準備を進めていたが、オンライン事前説明会実施後、本学での受入れ開始直前に参加者からプログラム参加辞退³の申し入れがあり、プログラムは中止となった。

プログラム名	派遣元大学(国)	受入期間	参加者数
Summer Travel Course	WCU（アメリカ）	2023/5/29	11 名
2024 East Asia Intercultural Communication Program in Osaka（プログラム中止）	ソウル教育大学（韓国）	・2024/1/5（オンライン事前説明会） ・2024/1/15-1/30（本学での受入れ） ・2024/2/6（オンライン振り返り）	7 名

3. 留学生を対象とした日本語日本事情科目

3.1 2023 年度開講の留学生を対象とした科目

正規留学生のための授業

学部留学生を対象とした科目は下記の通りである。日本語Ⅰa、日本語Ⅰb、日本語Ⅱa、日本語Ⅱb、日本語コミュニケーションの科目は 2 クラス開講している。

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1 回生	日本語Ⅰa/日本語Ⅰb	1（前）/1（後）	金・Ⅰ	李址遠/李眞善
			火・Ⅰ	横川未奈
	日本古代文化史Ⅰ/Ⅱ	1（T1）/1（T2）	金・Ⅳ	城地茂
	経済の目で見える地域と暮らしⅠ/Ⅱ	1（T1）/1（T2）	木・Ⅲ	高山新
	日本近代文学読解入門Ⅰ/Ⅱ	1（T3）/1（T4）	月・Ⅱ	石橋紀俊
2 回生	日本語Ⅱa/Ⅱb	2（前）/2（後）	火・Ⅰ	村井卷子
			木・Ⅱ/火・Ⅱ	井ノ口智佳/横川未奈
	日本語コミュニケーション	2（後）	木・Ⅰ	井ノ口智佳
			木・Ⅱ	井ノ口智佳

³ 2024 年 1 月 1 日に起きた能登半島地震の影響で、1 月 12 日に先方から参加辞退の連絡があった。

3 回生	外国語実践演習（日本語）	2（前）	木・I	井ノ口智佳
------	--------------	------	-----	-------

非正規留学生のための授業

2023 年度は非正規留学生のためのカリキュラム改正を行った。大きな変更点は、中級レベルの日本語科目を 4 科目に整理した点と、文化や社会に関する科目を新たに 3 科目（日本の現代社会、日本の地域社会、日本語実践プロジェクト）開講した点である。

非正規留学生対象科目

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
初中級	日本語初中級 a	2（前）	月・II	米澤千昌、市来海唯
	日本語初中級 b	2（前）	月・III	米澤千昌、市来海唯
	日本語初中級 c	2（前）	火・III	米澤千昌
	日本語初中級 d	2（前）	金・II	李址遠
	日本語初中級 f	2（後）	月・II	米澤千昌、市来海唯
	日本語初中級 g	2（後）	月・III	米澤千昌、市来海唯
	日本語初中級 h	2（後）	火・III	米澤千昌
	日本語初中級 i	2（後）	金・II	米澤千昌、下本有美香
中級	日本語中級会話I/II	2（前）/2（後）	水・II	高谷由貴
	日本語中級読解I/II	2（前）/2（後）	月・II	米澤千昌
	日本語中級漢字I/II	2（前）/2（後）	金・II	城地茂
	日本語中級作文I/II	2（前）/2（後）	火・II/木・III	村井卷子
中上級	日本語中上級総合I/II	2（前）/2（後）	月・III/火・II	米澤千昌/村井卷子
	日本語中上級読解I/II	2（前）/2（後）	木・III	井ノ口智佳
	日本語中上級漢字I/II	2（前）/2（後）	木・II	城地茂
	時事日本語I/II	2（前）/2（後）	水・I	高谷由貴
文化や社会に関する科目	Psychology and its Practice	1（T3）	火・V	高橋登、大河内浩人、水野治久、小松孝至、寺坂明子、渡邊創太、瀧野揚三、柳岡開地
	Contemporary Education in Japan	1（T3）	木・IV	高橋登、加賀田哲也、中山あおい、王林鋒、芦田祐佳、瓜生彩子、山岡賢三
	日本の社会と文化Ⅱ ⁴	2（後）	火・III	中山あおい
	日本近現代史	2（前）	木・IV	城地茂
	日本近世文化史	2（後）	金・IV	城地茂
	日本の現代社会	2（前）	金・IV	棟形康平
	日本の地域社会	2（後）	月・IV	棟形康平
	日本語実践プロジェクト	2（前）	金・III	米澤千昌、李址遠

⁴ 2023 年度前期の「日本の社会と文化Ⅰ」は不開講であった。

	関西発見プロジェクトⅠ/Ⅱ	2（前）/2（後）	火・Ⅳ	米澤千昌、棟形康平/ 米澤千昌、中山あおい 碓田智子、西川章江
	日本の伝統文化Ⅰ/Ⅱ	2（前）/2（後）	月・Ⅴ/金・Ⅰ	中山あおい、石川美久 太田順康、谷村さくら /池田利広、米澤千昌
	文化交流実践研究Ⅰ/Ⅱ	2（前）/2（後）	集中	高橋登、城地茂、中山 あおい、米澤千昌、棟 形康平、王林鋒
	日本文化研究	2（前）/2（後）	集中	指導教員・センター教 員

上記科目以外にも、いくつかの学部生用の科目において、非正規留学生の受講が認められた。下記表に記す科目が、その一覧である。

前期 (T1/T2)	日本語Ⅰa	後期 (T3/T4)	日本語Ⅰb
	日本語Ⅱa		日本語Ⅱb
	日本古代文化史Ⅰ/Ⅱ		日本近代文学読解入門Ⅰ/Ⅱ
	経済の目で見える地域と暮らしⅠ/Ⅱ		読むための視点
	日本事情		日本語の文法
	日本語学研究Ⅱ		日本語学研究ⅠB
	日本語教育概論ⅠA		日本語教育概論 B
	日本語学研究ⅠA		国際理解
	オーラルコミュニケーション中級Ⅰ		外国人児童生徒教育
	オーラルコミュニケーション上級Ⅰ		多言語実践プロジェクト
	国際理解教育		English World
	スポーツ実技		オーラルコミュニケーション中級Ⅱ
	English World		オーラルコミュニケーション上級Ⅱ
			Global Sports Communication

他にも、指導教員と相談し、受講が認められた学部開講科目に参加する留学生も見られた。

3.2 フィールドワーク、体験、自由研究を取り入れた科目

関西発見プロジェクトⅠ・Ⅱ

この科目は、昨年度までは「大阪の文化Ⅰ・Ⅱ」として開講されていた科目である。受講生の興味関心が「大阪」だけに留まらず、関西全域に向けられることも多いため、科目名を改め、大阪を中心に、関西の歴史や文化について、フィールドワークを通して学ぶ授業とした。前期には大阪城と柏原市歴史資料館を見学した。また日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（双方向）による奨学金受給のためのプロジェクトの一環として「歴史上の大事件を追体験プロジェクト」も行った。後期には、能体験、和菓子作り体験、重要文化財奥田家住宅見学を実施した。

文化交流実践研究Ⅰ・Ⅱ

文化交流実践研究Ⅰ・Ⅱは留学生が正規学生や地域の小学生と交流することで日本の文化や社会に対する理解を深めるとともに、日本の学生や地域の小学生の国際理解を促進することを目的に開講している授業である。留学生は正規学生と協働しながら自国を紹介するプレゼンテーションを作成した後、前期は2023年7月7日（金）、10日（月）、13日（木）に、後期は2024年1月18日（木）、19日（金）、2月5日（月）に柏原市内にある小学校を訪問して自国文化の紹介や児童との交流を行った。



日本語実践プロジェクト

この科目は2023年度から新規開講した科目である。グループで、大阪教育大学紹介動画を作成するというプロジェクト科目であり、異なる言語的、文化的背景を持ち、日本語レベルも異なる留学生が、協働しながら大学内の写真や動画撮影、学生へのインタビューなどを行い、動画を作成した。



（作成した動画の一部→）



日本文化研究

「日本文化研究」は交換留学生と日研生の修了要件として課されているもので、指導教員の指導のもとでレポートを作成し、発表する。レポートは 1)日本の言語・社会・文化等に関する論文 2)体験実践報告 3)留学成果報告 の3つのカテゴリーに分かれており、日研究生はカテゴリー1を選択しなければならない。留学期間が1学期間のみの交換留学生はカテゴリー3を選ぶことができる。修了レポートの成果を発表する「修了レポート発表会」は、前期は8月2日（水）、3日（木）に、後期は2023年2月7日（水）に対面で行われた。また後期は2月8日（木）に教研生の研究成果の発表会も行った。

前期	2023年8月2日（水）10:00～14:55	日研究生・交換留学生	15名	33名
	2023年8月3日（木）10:00～15:40	交換留学生	18名	

後期	2023 年 2 月 7 日（水） 13:00～15:30	交換留学生	9 名	18 名
	2023 年 2 月 8 日（木） 13:00～16:30	教研生	9 名	

4. 留学生の生活・就学支援

4.1 オリエンテーション

グローバルセンターでは、新学期が始まる時期に留学生を対象としたオリエンテーションを行っている。前期は下の表のとおり、4 月 6 日（木）に新入生と在校生を分けて、非正規留学生のオリエンテーション・履修ガイダンスを実施した。4 月 10 日（月）には、非正規留学生を対象に科目履修相談会を実施し、登録の方法や授業選択についてのサポートを行った。4 月 11 日（火）には、新入正規留学生を対象に、オリエンテーション・履修ガイダンスを実施した。新入正規留学生オリエンテーションでは、教員から一方的な情報提供をするのではなく、クイズ形式で資料の内容を確認したり、2 回生以上の学部生にも参加してもらい、先輩との交流の機会を設けたりした。

後期は 9 月 15 日（金）に在校非正規留学生のオリエンテーション・履修ガイダンスを、28 日（木）に新入非正規留学生のオリエンテーション・履修ガイダンスを行った。また授業開始後の 10 月 2 日（月）と 5 日（木）に科目履修相談会を実施した。

前期	4 月 6 日（木）	午前	新入非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（交換留学生・教研生）
		午後	在校非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（日研生）
	4 月 10 日（月）	非正規留学生科目履修相談会	
	4 月 11 日（火）	新入正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス	
後期	9 月 15 日（金）	在校非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（交換留学生・教研生）	
	9 月 28 日（木）	新入非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（交換留学生・日研生）	
	10 月 2 日（月）	非正規留学生科目履修相談会	
	10 月 5 日（木）		

4.2 チューター制度

本学では、留学生が大学生活や学習上のサポートを受ける「チューター制度」を実施している。学部留学生の定員化による受入れ人数増加により、同じ専攻内でチューター学生を探すことが容易ではなくなったため、2022 年度末に本学の在校生に声をかけ、留学生チューターに興味、関心がある学生の登録を開始し、指導教員がチューター学生を探すのが困難な場合は、そのリストからマッチングを行えるようにした。また、これまでチューター学生を対象に対面でのチューター会議を実施していたが、今年度からは、オンデマンドでの実施へと変更した。

4.3 アカデミック・ライティングサポート

正規留学生のアカデミックライティングスキルの向上を目指し、2022 年度後期よりアカデミック・ライティングサポートを開始、2023 年度も前期、後期それぞれの期末の時

期に実施した。

実施期間と日時：（前期）2023 年 7 月 18 日（火）～8 月 4 日（金）

月曜 3～5 限、火曜 3、4 限、金曜 2、3 限

（後期）2024 年 1 月 15 日（月）～2 月 2 日（金）

月、水、金曜日の 2、3、4 限

※休講日を除く

場所：A-309 教室

サポート内容：日本語のチェック、基本的なレポートの書き方についての助言、わかりにくい文を指摘し、修正文案と一緒に考える等

サポート体制：日本人サポーターが教室で待機し、マンツーマンで対応。1 回の相談枠は 30 分で、後ろに他の学生がいなければ、時間の延長可。

このサポートについては、留学生にメールで呼びかけたり、GLC の前にポスターを貼ったりする他、教員からも授業内で声をかけてもらうよう周知を行った。利用者数は、前期は延べ 20 名、後期は 9 名であった（複数利用者を含む）。

4.4 その他のサポート

2022 年度に作成した正規留学生のための対応・対策マニュアルに則り、就学に困難を抱える正規留学生に対しては Teams を用いて対応チームを結成し、対応にあたった。

5. 地域との交流活動等

5.1 ボランティアグループとの活動

本学では、様々な形で留学生と地域住民との交流が行われている。以下、グローバルセンターが関わっている活動を記す。

- ・授業期間中、香芝市のボランティアグループ「グローバル香芝」主催の日本語教室が毎週木曜日の 4 限と 5 限に行われた。

- ・前期は 5 月 27 日（土）に、後期は 11 月 12 日（日）に、グローバル香芝主催の「ホームビジット」プログラムが開催された。

- ・前期は 7 月 5 日（水）に、後期は 12 月 6 日（水）に、シニア CITY 自然大学校との交流が行われた。午前中は総合文化科講座の中の「国際交流講座」において、本学の留学生 1 名が文化紹介を行い、午後には講座生の方々と本学の留学生が、七夕笹飾りや門松作りを行った。

- ・前期は 7 月 12 日（水）、後期は 1 月 31 日（水）に柏原市民向けの講座「異文化の暮らしを学習しよう」が開催され、前期は本学の留学生 1 名が、後期は本学の留学生 2 名が国の紹介や市民との交流を行った。

- ・2 月 11 日（日）に、グローバル香芝主催の「日本の文化を楽しむ集い」が開催された。

5.2 学校等への留学生派遣

柏原市や東大阪市内の小中学校に在籍する外国にルーツのある児童生徒の母語支援や学習支援のために、教育委員会等からの要請に応じて本学の留学生を派遣している。留学生は各校において、通訳、簡単な日本語の指導、学習支援、および保護者向けの文書の翻訳等を行い、外国にルーツのある児童生徒の学校生活をサポートした。

他にも、以下に示す、小中高等学校における多文化共生教育、国際理解教育を目的とした教育委員会や各学校からの要請、附属学校からの外国語・外国語活動の授業への派遣要請にも対応した。

- ・ 東大阪市内小中学校多文化共生教育プログラム
- ・ 東大阪市カラフルコミュニケーションパーク
- ・ 大阪教育大学附属高等学校平野校舎イングリッシュサロン
- ・ 近畿大学附属高等学校
- ・ 大阪府立桜和高等学校 ENGLISH SUMMER SEMINAR
- ・ 大阪教育大学附属天王寺小学校外国語教育
- ・ 高校生国際会議

6. その他

2023 年 11 月 25 日（土）、26 日（日）にホーチミン、およびハノイで日本留学フェアが開催され、本学も参加した。両会場合わせると総入場者数 1,995 名という大規模な留学フェアであり、本学のブースにも両日合わせて 53 名が情報を求めて訪れた。

令和 5 年度 グローバルセンター行事

新入生オリエンテーション

令和 5 年 4 月 6 日（木）・7 日（金）・11 日（火）
9 月・15 日（金）・27 日（水）・28 日（木）

令和 5 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年は表のとおり 114 名の新入生が入学しました。

箱崎グローバルセンター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関する事等について説明を行いました。

近年は新型コロナウイルスの影響により、オンラインでの実施を余儀なくされた学期もありましたが、3 年ぶりに前・後期ともに対面での実施となりました。

区分	前期	後期
学 部 生	44	—
大学院生	18	—
教 研 生	9	—
日 研 生	—	15
研究留学生	0	1
特別聴講学生	13	11
研 究 生	2	1
計	86	28

オンライン留学説明会

令和 5 年 4 月 19 日（水）・26 日（水）
10 月 4 日（水）・25 日（水）

グローバルセンターでは留学に興味のある学生に対して、毎年本学で提供している留学の種類や特徴、必要な語学力などについて分かりやすく紹介する「交換留学説明会」「海外短期研修説明会」を実施しています。令和 5 年度も前期・後期各 1 回ずつ説明会をオンラインで行い、延べ 220 人以上の参加がありました。また、今年度は留学を考える上で重要な要素となる金銭的支援のサポートとして「奨学金説明会」も後期に実施しました。この説明会は、奨学金獲得のための重要なポイントについて情報提供することで、留学動機を改めて考えるきっかけとなり留学に対する目的意識を高めてほしいという狙いもあり実施しました。

4 月 19 日（水）・10 月 4 日（水）に実施した「交換留学説明会」では、グローバルセンター担当教員が交換留学に関する全体的な説明を行い、各協定校の情報などについても詳しく説明しました。今年は韓国とフィンランドに交換留学をした学生が説明会に参加し、現地の写真や生活の様子を共有しました。特に学生からは実際に留学した人にしか分からない留学実現までのスケジュールや語学能力向上のために頑張っていたこと、講義の内容に至るまで、留学を考えている学生に向けて詳しい情報の紹介がされました。「海外短期

研修説明会」は4月26日（水）・10月4日（水）に実施し、今年度本学が提供する短期研修プログラムについて紹介しました。令和5年度は新型コロナウイルス感染症の影響も収まり、カナダ・タイ・フランス・韓国・アメリカ・オーストラリア・シンガポールの7ヶ国の研修がラインナップとして並びました。各担当教員が現地や過去の研修の写真などを用いて各国を紹介し、研修内容も語学研修から教育大学の特色を生かした国際教育実習など幅広いものになりました。また、10月25日（水）に実施した「奨学金説明会」では、各奨学金の特色を詳しく紹介し、奨学金獲得のために必要なポイントを説明しました。初めての実施ではありましたが、留学目的や計画を考える際の重要な点を説明できる貴重な機会となりました。

参加した学生からは「実際に留学経験者に話を聞くことで海外での生活が想像しやすかった」、「各国の留学内容が詳しく説明されていたところが良かった」など様々な感想が寄せられました。

ご参加にあたってのお願い

- ・マイクとビデオはオフをお願いします
- ・質問はチャットにお願いします

★参加者の録音・録画はご遠慮ください
★主催者が録画をする場合がありますので、予めご了承ください。



大阪教育大学留学奨学金説明会
10月25日（水）12時15分～



フィンランドの協定校

オーボ大学パーサ校



- ・1918年に設立された北欧屈指の大学
- ・メインキャンパスはトゥルク市にあるが、教育学部のあるパーサ校と交流協定
- ・スウェーデン語とフィンランド語の二言語都市
- ・英語の授業が充実
- ・教育実習も可能

<必要な語学力>

- ・CEFR-B2程度

IELTS	6.0～
TOEFL iBT	78

オープンキャンパス

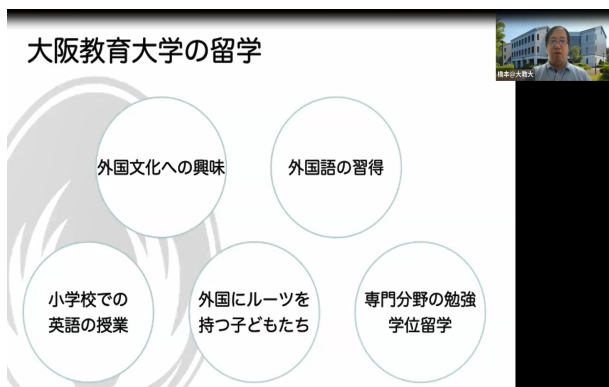
令和 5 年 7 月 29 日（土）・30 日（日）

7 月 29 日（土）にオンライン形式、30 日（日）に対面形式でオープンキャンパスを開催しました。それぞれの日程での日本人学生/留学生向けの留学説明会・相談会を開催し、留学に関心のある高校生や入学希望の留学生が参加しました。

オンライン形式では日本人学生対象説明会を実施し、本学が提供している留学の種類や特徴を「外国語の習得」や「外国文化への興味」等留学目的と共に紹介し、入学前だからこそプランを早めに立てることでより良い留学にできることを案内しました。交換留学経験者の卒業生も説明会に参加し、フィンランドでの留學生活や留学準備等を紹介しました。

対面形式では、日本人学生/留学生向けの留学相談会及びキャンパスツアーを行いました。留学相談会では教職員や学生スタッフが一組一組丁寧に対応し、参加者により具体的に詳しい内容を伝えられる機会になりました。キャンパスツアーでは、学生スタッフがグローバルセンターで運営している外国語学習支援ルームを案内し、入学後の外国語学習や留学に関するサポートについて紹介しました。

参加者は、グローバルセンター担当教員の説明に耳を傾け、質問内容からも留学に向け熱心に情報収集を行っている様子が伺えました。



令和 5 年度前期留学生修了証書授与式

令和 5 年 8 月 9 日（水）

令和 5 年度前期留学生修了式を 8 月 9 日（水）、柏原キャンパスで挙行之、33 名の留学生（交換留学生、日本語・日本文化研修生）をはじめ、来賓、教職員の約 70 人が参加しました。

昨年まで新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、参加者を学内者に限定しての挙行でしたが、今回は学外から多くの方々をお招きしました。

最初に、交換留学生のアデシター・ケイワンさん（ドイツ）と日本語・日本文化研修生のイ・スミンさん（韓国）に留学生代表として修了証書が授与され、学長の代理で国際交流担当の赤木登代副学長が「留学生は民間のアンバサダーです。帰国したら日本で体験したことをぜひたくさんの人々に教えてください。そして、日本のファンを増やしてまた何度でも日本に来てください」と述べました。

続いて、来賓代表として香芝市国際交流市民の会「グローバル香芝」の神野俊幸氏から祝辞があり、「日本で様々な出会いから結んだ『ご縁』を大事にして頑張ってください」とエールを送りました。

その後、2 名の修了生代表から挨拶がありました。

交換留学生代表のサイ・ケイコさん（台湾）は「何歳からでも学べることを信じ、留学した甲斐がありました。日本で学んだことを生かし、台湾と日本の文化交流に貢献したいです」とこれからの目標を述べました。

日本語・日本文化研修留学生代表のカネダ・パエス・ヤスミン・ミライさん（ブラジル）は「1 年間たくさんの人々に出会い、様々なことに向き合い、成長できました。日本で学んだこと、知り合った人たち、ここで作った思い出を一生大事にしていきたいです」と話しました。

修了式後は大学会館の Dining TERRA に会場を移し、交流会を行いました。留学生、来賓、教員が参加し、本学学生が演奏する金管バンドの音色を楽しみつつ、談笑を交わしました。交流会では、修了生は日本語でスピーチを行い、留学の思い出やお世話になった方々への感謝の気持ちを述べました。



第 14 回 グローバルセンター国際シンポジウム

令和 5 年 11 月 15 日（水）

令和 5 年 11 月 15 日（水）に「国際協働学習の先進例とこれから」と題し、第 14 回グローバルセンター国際シンポジウムを Zoom によるオンライン形式で開催しました。本シンポジウムはグローバルセンターが教員養成の国際的な視点に基づくテーマで毎年実施しているもので、学生及び教職員合わせて約 35 名が参加しました。

今年度は島根大学・教育学部小学校教育専攻の香川奈緒美准教授、本学からは多文化教育系の井上直子教授、副学長の赤木登代教授の 3 名が講演し、その後「国際協働学習の未来」について討論も行いました。

シンポジウムでは初めに、香川准教授が、国際教育を実施するためのプログラムの設計方法を紹介しました。対象学生への有効なプログラム形成・改善に取り組んでおり、一般的に良いとされている内容ではなく、データによって裏付けされたニーズに合わせて設計をすることで有意義な学びを提供できると紹介がありました。井上教授は以前から独自に取り組んできたオンラインでの国際協働の取り組みを例に挙げ、交流方法や課題等について紹介しました。最後に赤木副学長が令和 6 年度より学部 2 回生を対象に新たに必修科目として導入される「国際協働学習」の意義と課題について説明し、今後は「多文化共生」のための授業として言語面の障壁を取り除くことや学生の専攻に沿った授業の開発に取り組んでいくことが課題であると紹介しました。

講演後の討論では、国際協働学習の語学面以外での学生のコミュニケーション能力や成果の表し方が共通の課題として挙がり、議論が深まりました。

参加者からは、「具体的な事例に基づく説明でよく理解ができた」「日本人特有のコミュニケーションの課題の事例が印象に残った」等多くの感想が寄せられました。



令和 5 年度後期留学生修了証書授与式

令和 6 年 2 月 15 日（木）

令和 5 年度後期留学生修了式を 2 月 15 日（木）、柏原キャンパスで挙行之、留学生、来賓、教職員の約 60 人が参加しました。交換留学生 9 名と教員研修留学生 9 名が修了生として紹介され、交換留学生のキョ・リナさん（台湾）と教員研修留学生のカブレラ・バスケス・ジョセ・イスマエルさん（エルサルバドル）がそれぞれの代表者として、赤木登代副学長より修了証書を受け取りました。

その後、中原理事（国際担当）から祝辞が述べられ、「今日は修了式ですが、みなさんの勉強、努力が終了することはありません。人生の最後の日まで、ここでの経験を活かし、素晴らしい人生を送られることを祈念いたします」との言葉が贈られました。また、2 名の修了生から挨拶があり、交換留学生代表のマイ・チュン・ヒューさん（ベトナム）は「帰国したら、ここでの経験を活かして、日本語教師になって、次の世代の学生にこの経験を伝えていきたい」と述べ、教員研修留学生代表のビヤロボス・フエンテス・ナタリア・カロリナさん（チリ）は「ここで学んだ知識を活かして、より良く、思いやりのある、相互につながる世界に貢献しましょう（Let us carry the lessons learned here as we contribute to a world that is better, more understanding, and interconnected.）」と述べました。

修了式に続く交流会では、本学の学生団体である YOSAKOI ソーランサークル凜凜による演舞を鑑賞し、談笑しました。また、修了生全員がスピーチを行い、留学の思い出やお世話になった方々への感謝の気持ちを述べました。



第 17 回東アジア教員養成国際シンポジウム

令和 5 年 12 月 9 日（土）

「DX 時代における東アジア教員養成教育」をテーマとして、第 17 回東アジア教員養成国際シンポジウムを 12 月 9 日（土）にオンラインで東京学芸大学と共同で開催しました。本シンポジウムには、東アジア教員養成国際コンソーシアム（ICUE）に加盟する日本・中国・韓国の教員養成系大学等から、18 大学、約 150 名が参加しました。

開会式では、岡本幾子学長が主催者挨拶を行い、その後基調講演、ICUE 運営委員会、午後からは研究発表大会を行いました。研究発表大会では「DX と教員養成の発展」「社会構造の変化と教員養成・研修の在り方」「ダイバーシティ教育の課題と展望」という 3 つの分科会セッションを設け、大学院生・若手研究者による研究報告と討論が行われました。セッション 1 では田中満公子特任教授（総合教育系）が口頭発表を行いました。またセッション 3 では、王林鋒特任准教授（多文化教育系）がファシリテーターを務め、活発な議論が交わされました。

さらに本シンポジウムでは、ICUE のウェブサイト上で 1 ヶ月間スライド発表と討論を行う場「e ポスターセッション」を設け、瓜生彩子教授（総合教育系）と王特任准教授がポスター発表を行いました。

閉会式では、ソウル教育大学校の張龍奎副総長による次年度担当校挨拶があり、続いて東京学芸大学の川手圭一副学長が閉会の挨拶を述べました。

基調講演で紹介された中国の「国優計画」に象徴的なように、各国ともコロナ後の新時代に入り、次世代を見据えた国家規模の人材育成・制度作りが進行していることが浮かび上がる有意義なシンポジウムになりました。



令和5年度グローバルセンター担当教員名簿

所 属 等	氏 名	所 属 部 門
総合教育系	水 野 治 久	留学生教育部門
総合教育系＊1	寺 坂 明 子	留学生教育部門
多文化教育系＊1	王 林 鋒	連携開発部門・国際教育部門
多文化教育系＊1	小 林 翔	語学教育部門
多文化教育系＊1	藪 田 直 子	連携開発部門
多文化教育系	井 上 博 文	留学生教育部門
多文化教育系＊1	篠 崎 文 哉	国際教育部門・語学教育部門
多文化教育系	箱 崎 雄 子	国際教育部門
多文化教育系	橋 本 健 一	国際教育部門・語学教育部門
多文化教育系＊1	POOL JUSTIN PARKER	国際教育部門・語学教育部門
多文化教育系	小 林 和 美	国際教育部門
多文化教育系	櫻 澤 誠	留学生教育部門
多文化教育系	赤 木 登 代	国際教育部門
多文化教育系＊2	李 址 遠	国際教育部門・留学生教育部門
多文化教育系	石 橋 紀 俊	留学生教育部門
多文化教育系	井 上 直 子	連携開発部門・国際教育部門
多文化教育系	亀 井 一	連携開発部門
多文化教育系	GINSBURG JASON ROBERT	国際教育部門
多文化教育系	櫛 引 祐希子	留学生教育部門
多文化教育系	城 地 茂	連携開発部門・留学生教育部門
多文化教育系＊1	筒 井 瑞 貴	国際教育部門・語学教育部門
多文化教育系＊1	棟 方 康 平	留学生教育部門
多文化教育系	中 野 知 洋	連携開発部門・国際教育部門

所 属 等	氏 名	所 属 部 門
多文化教育系	中 山 あおい	国際教育部門・留学生教育部門
多文化教育系	BROWN ROBERT SANBORN	連携開発部門・語学教育部門
多文化教育系＊1	米 澤 千 昌	国際教育部門・留学生教育部門
健康安全教育系	碓 田 智 子	留学生教育部門
健康安全教育系	後 藤 健 介	連携開発部門
理数情報教育系	仲 矢 史 雄	連携開発部門
理数情報教育系＊1	藤 田 真 依	留学生教育部門
理数情報教育系	望 月 久 稔	留学生教育部門
表現活動教育系	出 野 文 莉	連携開発部門

任期：令和４年４月１日～令和６年３月３１日

＊１任期：令和５年４月１日～令和６年３月３１日

＊２任期：令和５年４月１日～令和５年９月３０日

令和5年度グローバルセンター運営委員会名簿

所 属 等	氏 名	備 考
グローバルセンター長	箱 崎 雄 子	委員長
グローバル副センター長	中 山 あおい	副委員長
グローバルセンター連携開発部門長	中 野 知 洋	部門長
グローバルセンター国際教育部門長	橋 本 健 一	部門長
グローバルセンター語学教育部門長	POOL JUSTIN PARKER	部門長
グローバルセンター留学生教育部門	米 澤 千 昌	部門長
多文化教育系＊1	王 林 鋒	センター担当教員
多文化教育系	亀 井 一	センター担当教員
多文化教育系＊1	篠 崎 文 哉	センター担当教員
多文化教育系＊2	李 址 遠	センター担当教員
多文化教育系＊3	棟 方 康 平	センター担当教員
学術連携課国際室	林 祐美子	センター長指名

任期：令和4年4月1日～令和6年3月31日

＊1 任期：令和5年4月1日～令和6年3月31日

＊2 任期：令和5年4月1日～令和5年9月30日

＊3 任期：令和5年10月1日～令和6年3月31日

編集後記

本号で、『グローバルセンター年報』としては、令和6年度は、さらに発展した年報となります。年報の内容は、寄稿文を主としたものとなり、電子出版という形態も継続する予定です。

今年度から、ようやく、コロナ禍の痛手から立ち直り、グローバルセンターの活動も制約を受けない形となりました。ただ、まだ通常どおり振舞うわけには行きません。ぜひ、来年度は、通常通り雄飛しようとした若者たちを、何とか海外へと送り出そうと心がけたいと思います。

現在では、PDF形式が主力のようですが、将来、更なる形式が生まれることもあるかもしれません。現在の形式が新たな時代にもある保障すらありません。当然、新たな媒体に移植するという作業は進められているのですが、中断してしまうと、復元が困難になってしまうでしょう。ただ、内容さえ優れていれば、後世の人々が、そうした作業を継続してくれることでしょう。そうしたことを考えると電子媒体へと変化した『グローバルセンター年報』が、これからも絶えることなく、続いて行くことを願ってやみません。

また、続いての声明になりますが、投稿された原稿は、グローバルセンターの帰属となります。

末筆になりましたが、私はめでたく定年を迎えることになりました。本誌に投稿していた先生方、大学生の皆様、今後も、国際活動に積極的に参加していただけるようお願いいたします。

2024年3月31日

文責・城地 茂

2024年3月31日 発行

大阪教育大学グローバルセンター年報 第28号

Bulletin of Osaka Kyoiku University
Center for Global Education and Research, No. 28

編集兼発行者

大阪教育大学 グローバルセンター

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

電話：072-978-3299, 3300